

心のふるさと

私が霞が関に赴任してから、地方から関東の大学に進学した大学生の教え子たちと会う機会があった。その中の一人がこんな話をしていました。

「この前、久しぶりに巣鴨に行ってきました。とても懐かしかったですよ。」

21歳の彼がどうして巣鴨を懐かしがるのか、その理由を聞いてみると、小学6年生のときの校外学習がきっかけだったようである。当時の商店街の方々とのお会いがあったからとのこと。初めて訪れる東京での緊張感ある活動であったこと、当時出会った商店街の方々の「おもてなしの心」に感銘を受けたこと、そして接客する際にお客さんがまるで本当の孫のように福島から来た自分を受け入れてくれたこと等、複数の要因が重なり、今でも当時の体験は思い出深いものだと話していた。今でも関わったお店の方々に会いに行くことも多いと言う。そして、次のようなことも話していた。

「僕のふるさととは福島ですけど、ある意味でここも（東京も）ふるさとです。」

今思えば、当時、私が勤務していた福島県内の学校では、学校から目的地までの放射線量を事前に測定し、管理職や保護者に「学習の目的と安全性」を十分に説明した上で校外学習を実施することもあった。誰もが不安な中で、子供の豊かな学びを支援しようと、当時一緒に勤務した同僚たちと今後の福島について夢を語りながら、試行錯誤していた日々を思い出す。

私が育ったふるさとの街並みや景色は、東日本大震災後に大きく変わってしまったが、福島で出会った人とのつながりは変わることなく、その方々と会うたびにふるさとを感じる自分がある。そして、霞が関に来てからも、福島に出向されていた文部科学省の先輩方や福島に縁のある職員の方々と思い出話をするたびに、ふるさとを感じる瞬間がある。

東日本大震災後、初めて福島を離れてから10か月。教え子の言葉に、今の自分を重ね合わせるわけではないが、霞ヶ関での人との出会いを楽しみ、全国の子供たちや教育関係者の皆様の思い浮かべながら、自分が納得できる仕事ができるよう試行錯誤していきたい。そして、そのような営みが、自分にとって新たな「心のふるさと」を創ることになるのだろうと確信している。

(T.W)

